

子供たちとの関わりの中で ～「がんばりまめ」の話～

園庭で遊んでいる子供たちに目をやると、雲梯（渡り棒）や鉄棒、登り棒に一生懸命取り組んでいる子供たちの姿が見られます。特に、年中児に多く見られます。逆上がりができたり、渡り棒の端から端までを渡りきり、中には後ろ向きで渡ることや1本ぬかしでリズムカルに渡りきってしまう子供もいます。登り棒では、手と足を上手く使って登りきり、「えんちょうせんせい ヤッホー。」と得意そうな顔をして声をかける子供。少しだけやってみようという子供など、興味の持ち方も様々です。

ついこの間のことです。

子 供 「せんせい ここみて。まめができたんだよ。」

○ 「あっ 本当だね。 まめができているね。」

子 供 「かわがむけて いたいんだよ。」 「わたしのは、ちょっとふくらんでるだけ。」

○ 「これは痛いよね。先生もできたことがあるよ。あっ こっちは、まめの赤ちゃんだね。」

子 供 「せんせいは どこにできたの？」 「なに（を）やって？」

○ 「先生も子供の時、逆上がりができるようになりたいなあとって何回も何回も鉄棒をやっていたら まめができたんだよ。 まめの皮がむけて痛かったよ。」

子 供 「そうだったんだ。」

○ 「そうだったんだよ。 ねえ、知ってる？ このまめは ただのまめじゃないんだよ。」

子 供 「えっ。なになに？」

○ 「これはねえ **がんばりまめ**っていうんだよ。がんばりまめは、できるようになりたいなあとって、何回も続けてやっているとできるんだよ。‘できないからもうやめた’なんて言わないでずっと頑張ってるやっているとできる すごいまめなんだよ。」と、**がんばりまめ**は、努力の表れであり、諦めないで取り組むことの大切さを知らせたのでした。

ちなみに、**がんばりまめ**とは、私が勝手につけた名前であり、子供たちにとっては頑張った勲章のようなものであり、大いに認めてやりたいのです。

そして、**がんばりまめ**を友達に自慢してほしいのです。このことが「ぼくもやってみよう。」「できるようにがんばろう！」など 友達に刺激を与えることを期待するからです。

子供たちは色々なことに興味・関心をもち、やりたいことがたくさんあります。その気持ちを大きくできるよう、これからも関わっていこうと思います。